書評

時枝誠記博士著『現代の国語学』の書評によせて

浜田敦

私は今まで「書評」の筆をとった経験をあまり持っていない。それは一つには、我国の学術雑誌にその為の特別の欄さえ設けていないものも少くないことを見てもわかる様に、一般の論文に比べて執筆の機会を与えられること自体が少かったのにもよるであろうが、私の場合は稀に提供された機会さえもむしろ積極的に回避して来たと云える。それには大体二つばかりの理由があったと思う。その一つは、私が書評と云わず、一般に他人の所説を批評すると云うことにかけて、甚だ不適格な人間であると心得ているからである。批評にかけての適格不適格は、恐らく生れつきの性格的なものに根ざすところが多いと思われるが、私の周囲の研究者仲間を観察しても、それがたしかにあると云うことがわかる。一つの型の人々は、第一他人の著書や論文をよむことがすきで、手の届くかぎり、場合によっては手の届かないものまで無理をしてでも、丹念にあさりよみ、よめばすぐにその論旨の大要をつかみとり、特にその所説の欠陥を掌をさすが如くに指摘する。しかもその記憶はたしかで、相当時日がたってからでも、必要に応じて、これこれの題目に関しては誰それがどの雑誌のいつ頃の号に書いている筈だと云うことを、立ちどころに述べることが可能である。一方において全くこれと逆の型の研究者がいる。その人は他人の著書論文をよむのが頭から嫌いであり、さし迫った必要から、最少限のものをよまされる時でも、その論旨がなかなかのみこめず、従ってその所説の長所や欠陥がどこにあるかもすぐにはわからない。又よんで後もそれをすぐに忘れてしまい、せいぜい何かこの題目について書いた論文があったナア位のことしか思い出せず、困った揚句、第一の型の人をつかまえて教えてもらうと云うことになってしまうのが落ちである。この様にして、前者がますます多くよみ、よむに従ってますますよみ方が上手になって行くのに反して、後者はますますよむのが臆劫になり、遂に上達することが出来ないのである。

この場合、必ずしも前者が「勤勉」で、後者が「怠慢」だと一概に片づけてしまうわけには行かない様である。その他の点では、むしろ後者の方が勤勉であることも決して少くはないからで

ある。又どちらの型の人が研究者としてよりすぐれているときめてしまうことも出来ない様で、それぞれにある長所において、それぞれの面で学問の進歩に貢献出来る筈だと思う。そして、たとい他人の所説をよむことが下手で嫌いな型の人と雖も、研究者であろうとする限り、全く他人の著書や論文をよまずにすますと云うわけには行かないであろうし、又前者の型の人も、やはり研究者であって、「評論家」でない以上、他人の説の批評をするだけですませられるわけのものでもないのである。しかも現実にはこの両者の型は一人の研究者の中に多かれ少かれ混在するもので、ある人はより多く評論家的であり、又あの人はより多く独断的な研究者だと云うことになる。私は、必ずしも「独断家」をもって自任しているわけではないけれども、少くとも他人の著書や論文をよむことにかけては、怠慢も半分手伝って、全く下手で嫌いだと云う点で、たしかに第一の型の人間でないことは自ら認めざるを得ないと思う。これが私の書評不適格性の一つである。

つぎに、批評と云うものは、私の考えるところでは、批評されるべき業績の欠陥を指摘することによって、著者に反省を求め、誤った点を是正して、より完全な学説をつくりあげることに役立てると云う、云わば建設的な性格をもつべきものであると思う。尤も、現実には、単に、他人のしごとにけちをつけ、あらさがしをすることによって、批評する者が優越感を味わい、又サディズム的感情を満足させるに過ぎない様な云わば破壊的な批評もなきに非ずであろうが、しかしそれは少くともあるべき姿ではないと思う。そして又その様な態度で批評がなされたとすれば、批評された人も、恐らくは、それによって自らの欠陥をさとるよりも、むしろかえってますます硬化し自己の殻の中にとじこもってしまうことが多いのではないかと思う。つまり批評の本来の目的が達成されないばかりか、逆効果さえも生むに至るのである。批評は単にその云い分が理論的に正しくさえあればよいと云うものではない。批評が人間対人間の関係において成立するものである以上一種の社交であり、従ってそれにはそれ相当の礼儀が必要なのである。つまり批評がよろこんで受け入れられる様な形式（云い方書き方）で行われなければ効果は期待出来ない。この場合所謂、「毒舌」的であることなどはその最も悪例に属するものであってそれは単に批評者の闘争本能を満足させるに過ぎないであろう。つまり批評と云うものは内容はあくまで学問的厳正さを必要とすると同時に、その形式においては感情の世界に属すべき礼儀作法が要求されると云う矛盾を本来含むものであり、批評の困難性も一つにはここにあると云ってよい。

なお、批評の礼儀も、雑誌に発表するとか、或は講演会や研究発表会などの公の場で行われる場合と、私的な通信や対談などのやりとりで行われる場合とでは自ら異った形式がある筈である。例えば親しい間柄同志が面と向ってならば「貴様の論文はなっちゃいねえ」位のことは云うだろうし、又そう云われても笑ってうけ入れられるのが普通である。しかし、同じことが若し公開の講演会や雑誌の書評などで云われたとすれば、それはむしろ「場所柄」を心得ない非常識として非難されるべきであり、批評された者も決して快よくは感じないし、又従って批評の目的である筈の反省を与える事も出来ないであろう。ここでは毒舌は無用でありゆとりのあるユーモアを含んだ言葉づかいが望ましく、せいぜい

諷刺を越えるものであってはならない。相手の言葉尻をつかまえると云うやり方ではなく、むしろ不用意な欠陥や不注意による云い落しを補って、好意的に著者の真意をくみとろうとする寛大さがなければならない。批評の段階では著者が正しいかそれとも批評する側が正しいかは未決であり、従って、はたして自分が正しいかどうかもわからないのに、昔の裁判官の様に未決囚である著者を罪人扱いで頭からきめつけると云う、思い上った独善的態度は、現代の社会生活では如何なる場においても慎しむべきである。ところが、実は、私自身礼儀とはおよそ縁の遠い野人で、むしろ毒舌を好んで用いる闘争的性格の人間なのである。これが書評不適格性の二つである。

更に私が、書評と云わず、一般に他人の所説に対する批判に甚だ臆劫である理由として、特に文化科学の根本的な問題に関して他の人の考えを真に理解すると云うことが極めて困難だと信じていることをあげなければならない。文化科学の立場に関する私の考えは既に別の機会に述べたことがあるが、要するに、その自然科学と異るところは、主観的であり、又思弁的であると云う点に存すると私は考える。一九五五年版の『国語年鑑』に載せられた展望、言語学において上村幸雄氏は

言語学者は、現在でも我が国で有力に行われているきわめて思弁的な国語理論や文法理論などの、我慢のならない非科学的な性格をいつまでも許しておくわけにはいかない。

と述べておられる。それと明らかには個人の名をあげてはいられないけれども、「現在我が国で有力な国語理論や文法理論」の中の少くとも有力な一つとして時枝博士のそれを考えることはそれほど不当ではあるまい。私はいまここでこの展望の所説の「批評」を行ういとまを持たないけれども、結論だけを云えば、むしろ「思弁的」であることこそ文化科学としての言語の学の特色であり、それを非科学的、云い換えれば非自然科学的だとして排しようとする立場には、私は賛成しない。思弁的とは即ち「哲学的」だと云ってもよい。正に文化科学は或る意味で同時に哲学でなければならないと私は考える。むしろ、哲学を持たない文化科学は単なる資料あつめに過ぎないのである。言語の文化科学は同時に言語哲学でもなければならないのである。一方、自然科学、例えば物理学は必ずしも「物理哲学」である必要はない。と云うよりむしろそうであってはならないとも云えるであろう。哲学的だと云うことは、推論の方向が上からだと云うことにもなりそうである。唯それが本来の哲学と異るところは、同時にそれが自然科学的でもあり、従って全く逆の、下からの推論の方式をも併せ採る点にある。

文化科学に携るものは常に対象についての思弁にふけりつゝ、しかも同時にその自然科学的観察を行わねばならない。或は云い方を換えれば、文化科学の方法は、本質的には研究者の「直観」によるべきものであるが、しかもその直観は常に自然科学的方法による対象の客観的観察によって検算されねばならないのである。そのことによってはじめて文化科学も客観性、即ち科学性を獲得することが出来る。いずれにしても文化科学の研究者は、一人一人がそれぞれ独自の立場、即ち哲学を持っていると云ってよい。この学問における真の意味の協同研究の困難性も実にここにその理由があると云えるであろう。極端に云えば、一人一人が別

の世界に住んでいる様なもので他人のやっていることが理解出来ないのである。ところが一方批評とか批判とか或は論争などと云うものは、本来両者が同じ立場に立つか、或は少くとも相互に他の立場を完全に理解すると云う前提の下に於いて成立する筈のものなので、若しそのことを無視して行うならば、それは批評にも論争にもならないと云わねばならない。ここに文化科学に於ける批評、論争などの本来的な矛盾があり困難がある。それは例えば国語学会の研究発表会などにおける質疑応答の様子を見ただけでもわかるであろう。その低調さは必ずしも参加者の怠慢や無気力のみに帰するわけには行かないと私は思う。これが私の「書評」を躊躇する一つの本質的な理由なのである。

更にいま一つ、やはりこの本質的なものにつながることであるが、それはほかでもない、今度与えられた課題自身についてである。ここで私は漸く書評としての本すじにそろそろ入ることが出来そうである。題して『現代の国語学』と云う。内容は二部に分れ、第一部は「近代言語学と国語学」第二部は「言語過程説に基づく国語学」と名づけられている。前者は、明治以後の、近代欧米言語学、特にソシュールの影響を受けたとされる現代国語学の展望であり、後者は、それ等近代言語学、現代国語学の主流をなすと時枝博士の云われる「言語構成説」に対立するものとしての、博士の「言語過程説」の入門的記述であり、ともに国語学の初心者への啓蒙を意図したとはしがきに述べて居られる。

「啓蒙的」な入門書が必ずしも『国語学』の様な学術雑誌の書評欄に不適当だと云うわけではない。従来もその様なものをとりあげた例はあったと思う。しかし、一般的に云えば、その様な内容の書は、これを著わすことと共に、批評するにも、むしろ専門書よりもはるかに困難だと云うことは出来るであろう。その理由は、第一に、専門書ならば、内容が比較的狭い分野に限られている為に、少くともその専門に属する研究者にとっては、比較的理解が容易であるのに対し、啓蒙書にあっては、著者も批評者も、自分の専門とは多かれ少かれはずれた、相当広い領域を見通す視野が必要であり、厳密に云えばあまりよくも理解していない事柄に対しても、一応知っている様な態度をとらなければならない。従ってその様な書は、いろいろの意味で、かけ出しの若造には到底手が出せない筈であり、学問的にも、人間的にも海千山千の老大家にしてはじめて可能であろう。特にその様なものを批評するとなれば、更にその上を行くほどの碩学でなければ出来ない筈である。幸いにして著者はその条件を十分にみたし得る老大家時枝博士であるけれども、批評を命ぜられた私は、悲しいかなまだ殻を尻につけたひよこでしかない。私から云えば相手にとって不足はない時枝博士であるけれども、博士からすれば甚だ物足りない雑兵なのである。

私は今時枝博士がこの様な書を著わされるにふさわしいと一応云ったけれども、それは「老大家」であると云う点においてであって、実はその他の点ではそれがいささか疑わしいのではないかと思う。私は時枝博士の学問なり性格なりをよく知っていると云う自信はもっていない。しかし私なりに観察したところでは、最初に述べた二つの型の、どちらかと云えば決して評論家型ではなくその逆の型に属する研究者の様に見うけられる。そしてこの判断に関する限り、博士自身は別として、多くの人々の賛同を得ら

れるのではないかとひそかに自信をもっている。さがせばあるかも知れないけれども、博士もあまり「書評」などは物されない様である。これも博士が評論家でない一証とも云えるであろう。恐らく他人の著書論文の数行を読むか読まない中に、おう然として自分自身の考えがわき起り、頭に入りかけていた他人の説を押しのけてしまい、それ以上他人の考えについて行く事が出来なくなる、と云った性格の方ではないかと私は想像している。つまり博士は、少くよみ、多く考えると云う型の人なのである。これは勿論博士の生れつきの性格でもあろうけれど、更にそれを強く育てあげたものは、博士が青壮の二十年近くをそこで過された京城大学と云う環境ではなかったかと思う。この様な性格が学問の研究者として望ましいものかどうかと云うことははじめにも述べた様にそう簡単にはきめられないことではあるけれども、少くとも本書の第一部、即ち「展望」の著者としては、私はどうも適任だとは云えない様に思うのである。展望は、書評よりも更に多くの評論家的素質を必要とする筈だからである。それは多くの著書論文を一つ一つ丹念によみ、一人一人の著者の考えのあとをたどりながら、その「真意」をつかみ、更にそれが言語学、国語学の歴史の流れにおいてどの様な位置を占めるべきかを判断しなければならないと云う大変なしごとである。従ってそれは、たとい評論家的素質を豊かに恵まれた学者にしても甚だしく困難なわざであろうこと疑ない。そしてそれは特に外国語で書かれた欧米の言語学の文献について著しい筈である。外国語をあやつるのに特別な天分を持つものでない限り、それ等外国語特に英独仏語で書かれた文献の主なものだけを一応のすじをたどる程度にでもよみこなすことすらなかなかの大仕事と云わねばならない。相当外国語に堪能な人でも、母語である日本語で書かれた文献をよむ数倍の時間と労力とをそれに費さねばならないのである。

かつて亀井孝氏は京都での国語学会の席上で、国語学者はもっと欧米の文献に目を通す必要のあることを力説されたことがあった。私は理論としては、それはそれで一応筋の通った発言であったとは思う。しかし、現実の問題として、既にかかえ切れないほど多くの仕事をもっている国語学者に対して、更に少くとも英独仏語で書かれた欧米の文献の主なものだけにでも目を通すことを要求することがはたして可能であるか、又それを無理にしたところで、それが全体として国語学の発展にプラスになるかどうかについては、いささか疑なきを得ないのである。学問に国境なしと云われるけれども、思うに文化科学、特に、言語そのものを、或は言語を素材として成立する文学を、対象とする学問においては、そのことは、云うは易いけれども実行することは至難であろう。殊に印欧語と言語の構造系統を全く異にする我が国において国語、国文学者が、丁度英、独、仏の言語、文学研究者が相互に他の国の文献をよみ、意見を交換しあうと同じ様に、英独仏語の文献をよみ、又その国の学者と意見を交換すべしと要求するのは要求する方が無理と云わねばならない。若しそれを正直にやろうとすれば、恐らくは本業の国語学国文学の研究自身の方がおろそかになってしまうこと必定である。又、どちらをもほどほどにやると云うことであればそれは結局アブハチとらずでしかないであろう。ここに、我が国の国語、国文学者の置かれた悲しむべき宿命があると云ってよい。

この様な矛盾を解決するために、特に我が国の言語の学問の世界に、恐らくは欧米の学界には見られないであろう珍奇な現象が出現したのである。それはほかでもない。国語学、国語学者のほかに、言語学、言語学者と云う、大学の学科や学者の部類わけの伝統が明治以後いつの間にか出来上ってしまったことである。そしてこの言語学、言語学者こそは、国語学者に出来ない、或はそのひまのない、欧米の言語学文献をよみ、それを我が国に紹介し移植すると云う云わば通訳的役目をはたすものなのであった。そして国語学者の方は、言語学者によって伝えられた欧米の言語理論を指導原理としてそれを日本語に適用し、整理する役割をつとめると云う一種の分業が成立したのである。この様な場合たとい借物にしても理論と云う武器をもつ言語学者が指導者の座にすわり、国語学者はその指導の下に頤使される肉体労働者の地位しか与えられなかったのは当然のことであろう、そしてそれは、多少の程度の差はあっても、明治以後の或る期間、後進国であり、又いろいろな意味で世界の主流から隔絶された我が国のすべての学界の置かれたあわれな状態なのであった。そして言語および文学の学問では、その対象の特殊性から、この様な云わば変則な状態が、現在に至るまでつづいていると云うだけのことなのである。しかしすべてを特殊な悪条件のせいにしてすましているだけでは問題の解決にはならない。そしてこの問題を解決しないことには、いつまでたっても、国語学国文学が、世界的視野に欠けているとか、欧米に比べて水準が低いとか罵られても、いたし方がないことになる。

時枝博士の旧著国語学原論がまずソシュール批判にはじまっていることは周知の事実であるが、この「現代の国語学」も同様にその第一部はソシュールに焦点のしぼられる近代欧米言語学説の批判によって多くのページが占められている。ところが、博士のソシュール批判については、その正しい理解の上に立っていないと云う再批判の声の高いことも周知の事実であろう。例えば最近のものとして服部四郎博士の「言語過程説について」なる論文がある。ソシュールを理解することにおいて時枝博士に誤りがあるか、又専門の「言語学者」である服部博士が正しいかは、私にはわからない。唯云いたいことは、特に文化科学の根本的な問題に関しては、母語である日本語で書かれた文献によってさえも、著者の「真意」をつかむことは甚だしく困難であり、厳密に云えば一般にその様なことが可能であるかどうかをも私は疑うものである。ましてそれが母語ではないことばで書かれ、しかも著者ソシュールの死後弟子達の祖述したと云われるものについて、著者の「真意」をつかんでいないなどと云って非難出来るものであろうか。むしろ私は、それを非難する人に向って、あなたはそれならソシュールの「真意」をつかんでいると云う自信がおありなのですかと反問したい位である。ここでも私は、ソシュールを批判される時枝博士に、又その批判を再批判される服部博士その他の人に対して、批判、批評は表現の末梢的な字句をとらえると云う、「あげ足とり」ではなく、むしろその字句の背後にひそむ著者の真意そのものを、好意的な立場で、寛大に解釈される様望んでやまないものである。

その様な解釈をするならば、例えば、近代言語学が十九世紀以後の自然科学の発展と無関係ではなく、云わば自然科学的言語観

の上に立つものであると云う博士の指摘は、たしかに肯綮にあたっていると云ってよい。そしてそのことは、言語学者と云わず、一般に文化科学に従事する者の抱いている、自然科学に対する抜くべからざる劣等感への反撥であり、警告でもあろうと思う。例えば服部四郎博士がその著『音声学』の序論において「現在我々の経験科学のうちで最も進んでいるものは物理学であるが……」と述べておられるものなど、その最も手近かな一例であるが、若し「経験科学」の中に私達の文化科学をも含め、又「進んでいる」と云うことが、価値に関してのことであるとするならば、私の様に文化科学を自然科学と全く異質的な（立場を異にする）科学と考える者にとっては全く首肯し難い発言だと云わざるを得ない。次元を異にした立場に立つ両者を比べて、その間に優劣、即ち発達、未発達の段階をさだめるなどと云う事は全くのナンセンスでしかないからである。そして、少くともこの様な「言語学観」に関しては、時枝博士の考えは私と相通ずるものがあるらしく思われる。

又博士は欧米の言語学において「文字」が「音声」に比べて等閑に附されていることに対して抗議を提出しておられるが、この点に関しても全く同感である。しかし、その事がはたして云われる様にすべて「自然科学的言語観」に縁由するものかどうかは、私は疑わしいと思う。むしろ、その様な欧米近代言語学の影響を多分にうけて成立した筈の現代国語学においてさえ、欧米におけるよりも比較的文字論が重要な位置を占めていると云う事実の方が問題にされるべきではなかったかと思う。仮名（平、片、変体）漢字（音—呉、漢、唐—訓）さらにローマ字と云う比類のないほどの複雑な文字体系であることが、いやでも文字により多く目を向けざるを得なかった一つの理由ではなかっただろうか。丁度それは我が国で地震に関する研究が比較的発達していることなどと相似た現象であるかも知れないのである。

一体この問題に限らず、博士はものごとを簡単に片づけてしまわれ過ぎはしないかと思われる点が少くない。例えば時枝博士の「言語過程説」と対立する他のすべての国語学者、言語学者に対し、十把一からげに「言語構成説」のレッテルを貼ろうとされたり、又それを直ぐにソシュールにむすびつけようとされる如き。橋本進吉博士がそうだと云われるのは、まだしも或はそうかも知れないと考える人もあろうけれども、山田孝雄博士がSaussurianだとは、少くとも山田博士自身は夢にも思いがけられなかったところであるに違いない。

言語がはなす「こと」ではなくして、はなされる「もの」であると云う時枝博士の所謂言語構成観は必ずしもソシュールに始るものではなく、又その逆の、はなす「こと」そのものだと云う言語過程観も、決して時枝博士に priority が与えられるものでないことはさきほどの服部博士の批判の中にも指摘されたとおりである。一般に「—観」とよばれる様な根本的な物の見方、考え方に関しては、ギリシャ以来同じ様な論争が常にくりかえされていると云ってよい。従って、単に結果だけを見て、考え方が似ているからと云って、直ちにその両者の間につながりがあると片づけてしまうととんだ間違いが生ずることがある。大ざっぱに云うならば、「言語観」には「こと」と考える立場と「もの」と考える立場との二つしかあり得ない。とすれば如何なる言語学者と云え

ども、この二つのいずれかを選ばざるを得ないのである。

と云って、私は、私達の学問においてこの様な根本的な問題を考えることが無用のわざだと云うのでは決してない。若し誰かが既に同じ様なことを述べていると云うわけで、それをしてはいけないとするならば、「哲学」は勿論のこと、或る意味で多分に、「哲学的」である私達の学問は全くやり甲斐のないものでしかないであろう。個々の言語事実についての実証的な研究ならば、既に誰かが一度述べたことをくりかえすのは、たとい先行の文献のある事に気づかなかったことはそれほど責められるべきではないにしても、やはり研究自体の価値は低いか、場合によってはゼロになる可能性があるけれども、言語観と云う様な、立場そのものに関する論議は、たとい同じ様なことが既に、しかも印欧語などに関して述べられていたとしても、それと無関係に、日本語に関して、しかも日本語の観察、反省にもとづいて、同じ様なことが考えられたとしたら、それを発表する事は一向差支えないのではないかと思う。むしろその事によって、国語学の側から一般言語学的理論の建設に寄与出来る筈である。この様な一般言語理論を問題とする場合従来の我が国の言語学者が、自分の頭で、しかも母国語である日本語にもとづいて考えようとするよりも、むしろ手っとりばやく欧米において既成の、しかも印欧語にもとづいてなされた理論によりかかろうとした態度そのものが反省されるべきであろう。しかしそれではいつまでたっても欧米の学者のあとを追っかけるばかりで、その上に出る事は困難である。やはり私達のとるべき道は、欧米の言語学文献に常に関心をもちつゝも、やはり主としては自分の頭で、日本語について考え、そこから理論を生み出して行くと云うよりほかにはない筈である。

自分の頭で日本語について考えると云う点において、時枝博士がむしろ典型的な、申し分のない研究者であることは、恐らく皆人の認めるところであろうと思う。しかし、唯それだけでは、視野が狭く、独断におち入る危険が多分にある。事実その様な非難が既に博士に対し放たれているのではないかと思う。そして、その様な非難、批判に対して、博士が若し耳を蔽われる様なことがあったとすれば、それは既に「頑迷」であり、同時に博士の学説の行きづまりを意味するものでしかないと思う。

人は誰でも案外自分のしていること、考えていることが、客観的な立場から見て、どの様な位置にあるかと云うことに気づき難いものであるが、しかし、少くとも学問の研究の場合には、困難ではあるけれども、時に考えの転換を行う必要がある。私は、このあたりで、時枝博士が「言語過程説」を一度離れ、自由な見地から、それを見直してみられる必要がある様に思う。自分の考えに自信をもつことは必要であるが、それにあまり執著し過ぎれば頑迷固陋となってしまう。殊に私達の文化科学の世界は、唯一つだけの考え方、立場しか存在を許されないと云う様な窮屈なものではない筈である。私は時枝博士の学説が、丁度私の大学に在学していた昭和十年前後の頃から現在までに、国語学界においてはたした役割を、むしろ大きく買おうとするものであるが、それだけに最近その発展がゆきづまり、むしろ学界から置き去りにされようとする傾向が見られるのではないかと云うことを甚だ悲しむ。そしてその根本的な理由の一つが、あまりにも、「言語過程観」を固執され、他の批判に耳を傾けられようとされないところ

にあるのではないかと考える。いますこし、考え方に柔軟性がほしいと云う感じがしてならないのである。なお第二部に要約された博士の学説の個々の点に関しては既に幾つかの批判が世に問われており、いまさら私のくちばしを挿む余地はないであろう。殊に最近の服部博士の批判はその内容において又その形式において最もすぐれたものと云ってよい。同じ趣旨の講演がさきに京都でなされた時、私は冗談めかして博士に、私どもの期待していたよりも、批判が甚だ「微温的」だと申したのであるが、実はこの、「微温的」であると云うことこそ批判に不可欠な要件であり、従って、恐らくは、それは従来の時枝説批判の中で最も効果的なものでもあったと信じている。この服部博士の批判に対する時枝博士の解答が近く同じ雑誌上に発表される筈であるが、私は健全な批判とその応答の上に立って、時枝博士の学説が更に飛躍発展することを刮目して期待したいと思う。そして最後に、私が書評に如何に不適格であるかと云うことを正にいま実例をもって示したことを恥しく思う。

本書は昭和三十一年十二月、有精堂発行A5、二三四ページ定価二九〇円である。

（昭和三二・四・六）

—京都大学助教授—